

## 「子どもの権利とスポーツの原則」に賛同します。

令和元年7月26日

第41回全国スポーツ少年団ホッケー交流大会開会式

公益社団法人日本ホッケー協会スポーツ少年団部会は、ユニセフ（国連児童基金）と公益財団法人日本ユニセフ協会が提唱する「子どもの権利とスポーツの原則」に賛同し、子どもたちの健康で元気な未来を見つめ、ホッケー活動を通して、子どもの権利とスポーツの原則を守る活動を実践していきます。

○ 子どもの発育と発達に合わせた指導を行います。

（実践例1）子どもによって成長のスピードが違います。また、自分の成長に気づくタイミングもあります。その子どもの発育と発達のバランスに沿った指導を心がけます。

（実践例2）子どもたちの年齢差や技術差があっても、競い合って楽しめるような練習メニューを組むことで、練習に対するモチベーションを高められます。例えば、リレー形式の練習を取り入れたり、チーム全体で個人をカバーする練習メニューを提供したりします。また、小さい子にはハンディーキャップをつけ、大きい子と互角に競える練習メニューを考案します。

（実践例3）ウォーミングアップの時から、子どもたちと一緒に体を動かします。特に小さい子や運動の苦手な子と一緒に体を動かし、気後れすることなく、気持ちよく練習に取り組めるよう努めます。ウォーミングアップメニュー（鬼ごっこ、ダンス、ドッジボール）も工夫し、楽しく練習する雰囲気を作ります。

（実践例4）試合の勝敗より、がんばった過程が大切です。そして、仲間を応援する心も大切です。子どもの将来を見据えた指導を行います。

（実践例5）一人ひとりのがんばりを認め、褒めていきます。試合に勝ったときは子どもたちと一緒に喜び、負けたときは子どもたちと一緒に振り返り、選手と共に成長していきます。指導者が子どもたちと一緒に振り返ることで、課題把握や次への目標設定ができます。負けを失敗ではなく、勝つためのステップととらえます。

（実践例6）子どもの成長には個人差があり、ゆっくりと成長していきます。できなくても待つてあげるだけの寛容さも必要となります。

（実践例7）子どもたちの心と体は、時間をかけ日々少しずつ成長していきます。未発達な子どもたちへの厳しい言葉かけや過度な練習は、健全な成長の妨げとなります。指導者は子どもたちの健全な成長をイメージしながら、指導

していきます。

(実践例8) 個性を伸ばす指導を実践します。

(実践例9) 様々な違うスポーツを取り入れます。体の各部分をバランスよく成長させることが大切です。

○ 子どもたちに、元気や勇気が出る声かけをします。

(実践例1) 試合中の選手交代の時「〇〇さん交代」と呼べない選手がいます。自分では呼びたいのですが、人を呼ぶタイミングが分からないのです。そんな時、コーチは交代で入る選手の横に行き、片足の膝を地面に下ろし、選手と同じ目線で一緒に「〇〇さん交代」と呼びます。勇気もらった子どもは元気にグラウンドに駆け出して行きます。その子が自分一人で交代できるようになるまで、何度も呼びかけにつき合います。

(実践例2) ベンチからは、子どもたちのやる気を引き出し、子どもたちが萎縮せず伸び伸びとプレーできるよう「ナイスプレー」「いいぞ」「ドンマイ」などと声かけをします。

(実践例3) 子どもたちへの声かけは、強制的な指示ではなく、「この場面ではどうするといい？」というような子どもたちがプレーに対して考えるような声かけをします。これらをチーム全体で共有することで、チームのプレーの幅が広がります。

(実践例4) 「この理由がわかる人？」と聞くと、自ら手を挙げて発表する子どももいます。しかし、時と場合によっては、指導者から指名して、応えやすいような雰囲気を作ります。

(実践例5) シュートミスした場合、「良いシュートだよ。どんどん打っていこう。ボールをしっかりと見てね。次は入るよ。」といった感じで、前向きな声掛けをしていきます。

○ 子どもたちが「自分の言葉」で生き生きと話せるよう、応援します。

(実践例1) 試合終了後、相手チームの選手に感想を話したり、アンパイアーに感謝の言葉を伝えたりする「相手を讃えるセレモニー」が行われます。相手の技術やチームワークのすばらしさを伝え、公平に審判していただいたアンパイアーにも感謝の言葉を述べます。自分の思いを自分の言葉で正しく伝えることは人としての成長につながります。

(実践例2) 自分たちのプレーや行動に自信が持てるようチームみんなで返事をします。みんなで一緒にする返事からは、大きな勇気もらうことができます。練習の時だけでなく、見守ってくださる方からの励ましの言葉などにも元気

に返事をして、チーム全体を盛り上げます。

(実践例3) 大会の開会式などでは、来賓の方から激励の言葉をいただきます。その時、思い切って、一人が返事をすれば、返事はチーム全体に広がります。また、その返事の広がりには他のチームにも勢いよく広がり、会場全体の士気が高まり、会場は一体感に包まれます。

(実践例4) 他人を応援することで自分も相手から勇気や感動をもらうことができます。相手を自分の鏡に写して応援できるような指導を心がけます。

(教本P9)

(実践例5) 練習の始めにその日の当番が「元気に声を出していこう」「精一杯頑張ろう」「笑顔でいこう」などの今日の目標を伝えます。練習終わりには、選手それぞれが「〇〇さんの声から元気をもらいました。」「今日は、いつも以上に精一杯走ることができました。」など自分の言葉で振り返らせ、育てます。

○ いつでも、フェアプレーすることの大切さを伝えます。

(実践例1) 最後まで、正々堂々とプレーすることが大切です。微妙な判定に足を止めず、次のプレーに集中する大切さを伝えます。全力で行う良いプレーが、皆の気持ちを一つにしていきます。

(実践例2) 「自分たちは、いつでも『フェアプレー賞』をもらうんだ。」という気持ちで試合に臨ませます。フェアプレーを積み重ねることで、自分たちの技術と心が磨かれていきます。

(実践例3) 指導者も活動ができることに感謝の気持ちを忘れません。子どもたちにはもちろん、一緒にプレーする相手チームや応援してくださる育成会などへ、感謝の気持ちを言葉や態度で表していきます。

(実践例4) 年度の始めに個人で目標達成シートを作り上げます。それには技術や体力的な目標だけでなく、毎日の生活習慣や善行についての目標を設定します。毎日、目標達成を心がけることで、フェアプレー精神の醸成につながっていきます。

#### JFA サッカーファミリー安全保護宣言

- 1 サッカーにおける暴力・暴言を根絶します。ゼロ・トレランスの実現
- 2 子どもたちをハラスメントから守ります
- 3 子どもたちの健康を守ります。
- 4 良い指導者の養成と有資格指導者を適正に配置します。
- 5 暑熱環境下等でのサッカー環境を改善します。
- 6 年齢・性別・障がい・人種に関係なく、サッカーを楽しめる環境を整備します。